

# こぼれる気持ちと伝わることば

## ——コミュニケーションの研究——

福島 祥行

文学研究科・文学部 フランス言語文化

fukushim@lit.osaka-cu.ac.jp

### 0. こぼれる気持ち

たとえば、(1)~(3)のような会話があるとしよう。

(1) A: なあ、浅野って、いま、カレシおるん……？

B: おれへんけど……

A: へっへっへっ……

B: なんで笑うんっ……！ 深見のアホっ……！

(2) B: あーあ、瑞恵って、ほんま、可愛いなあ……

A: けど、浅野かて、けっこう、可愛いで……

B: ふん、どーせあたしはブスですよ……

A: いや、そーゆー意味やのうて……

(3) A: 浅野、あした、ヒマ……？

B: ヒマやけど……？

A: どっか行けへん……？

B: なんで……？

これを読んで、あなたは、どう思っただろうか？ たぶん A は男の子で B は女の子で、A は B のことが好きで、でも B はそんなこと想像だにしていなくて……。誰しも一度くらいは経験することだ。

たとえば、(3)である。A が B をデートに誘っているのは明々白々ではなかろうか。つまり、「どっか行けへん？」の《意味》は「デートしようよ」なのである。これはもしかすると、ことばに「表の意味」（文字通りの意味）と「裏の意味」（解釈された意味）があるということかもしれない。B は「裏の意味」を引き出せなかったということになる。

一方、(2)はどうか。A は勇気を出して、彼にとっての事実を述べたにちがいない。けれど B は、それを「皮肉」と取った。つまり彼女は、(3)とは逆に、本来無いはずの「裏の意味」を引き出してしまったというわけだ。

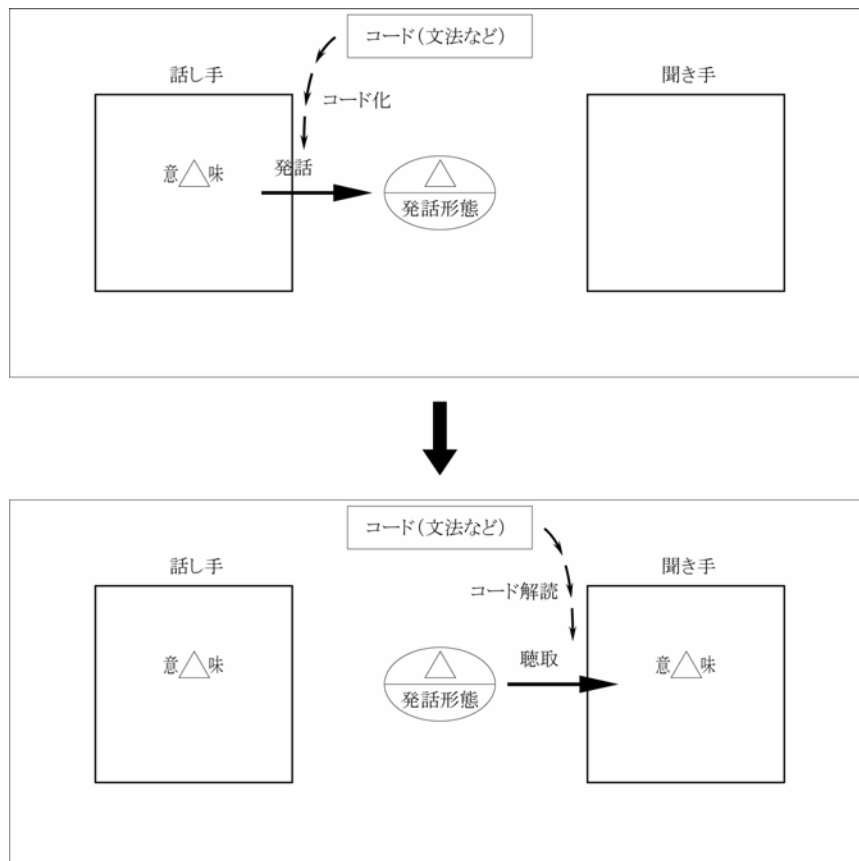
もしあなたが A だったら、どうだろう。なんて鈍感なやつめ、とヒフンコウガイするだろうか。あるいは、あゝ云い方がマズかった、とへこむだろうか。もしくは、ことばなんて、そう

いうもんさ、と諦観するかもしれない。いずれにせよ、ことばでは「伝えたいもの」が「伝えきれない」場合があるということだ。

## 1. コードモデル

ト、そんな風に思った人は、「コミュニケーション」の図式を描くと云われたら、(4)みたいなものを描くのではないだろうか。

### (4) コミュニケーション図式 1



この図の示すところは、コミュニケーションというものは、①話し手が心（頭？）の中で「伝えたいこと」（＝《意味》）を抱く→②ことばの形（発話形態）にする→③聞き手がそれを聴き取り、心（頭？）の中で、話し手の「伝えたかったこと」（＝《意味》）を復元する、というものだ。そして、上の過程の中で、①→②と②→③のときに、そのことば特有の「コード」（code＝規則）<sup>1</sup>（たとえば日本語なら、直接目的語には「ヲ」を付けるとか）に従うことになる。すなわち、①→②は「コード化」（encode）、②→③は「コード解読」（decode）。とにかく、(4)のようなコミュニケーション図式を「コードモデル」と呼ぼう。この「コードモデル」こそ、コミュニケーションの基本図式だと云う人は、大層多い。たしかに、日本語の文法と単語の知識が

1 これは、日本語やフランス語のような言語が対象の場合、「文法」と呼ばれることが多いけれど、暗号や、「赤い丸に白い横棒が入った標識は進入禁止」だとかいう「約束ごと」一般のことだと思ってかまわないだろう。このような「あるモノXを表すのに、別のYを用いる」場合のYを「記号」(sign 仏語ではsigne)と呼ぶ。

あれば、(2)の「けど、浅野かて、けっこう、可愛いで……」ということば(=発話)の「表の意味」は理解できるだろう。けれど、(3)の「どっか行けへん……？」の「裏の意味」はどこから出てくるのだろうか？ そして、Bは「けっこう、可愛いで」の「裏の意味」を(そんなものはどこにも無かったはずなのに)、どうやって引き出してきたのだろうか？

つまり、コミュニケーションは、この「コードモデル」だけでは説明できないわけだ。実際、「コードモデル」を批判する人たちは、次のような文の《意味》を知るためには、「コンテクスト」(context = 文脈)が必要だとする。

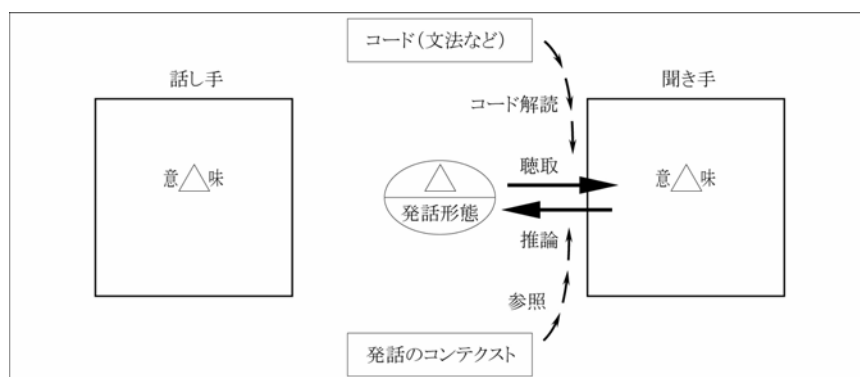
(5) オレ、あした、ヒマやねん

さあ、あなたはこの発話を聞いて、日本語の文法や単語の知識だけで、この文の《意味》を汲み取ることができるだろうか？ もちろん、できない。「誰が」「いつ」暇なのか？ この文からだけでは、如何に日本語について詳しくとも、それを知ることはできないのだ。この文の発話者が「深見高志」だとか「ユーリウス・カエサル」だとかいう情報と、発話された日が「2003年8月6日」だとか「B.C.44年3月14日」だとかいう情報を知らなければ、「深見高志が2003年8月7日に暇である」という《意味》を引き出し得ないのである<sup>2</sup>。そして、そのような「言語外の情報」の源となるのが「コンテクスト」というわけだ。

2. 推論モデル

流石に、実際のコミュニケーションを「コードモデル」だけで説明しようとする人はいない。普通は「コンテクストからの推論」というオプションが付いてくる。つまり、(4)の下を図を次の(6)のようにした図式である。

(6) コミュニケーション図式1改



たしかに、これで大体のケースはカバーできるように思える。(2)(3)の例で、「裏の意味」が出て来たり出て来そこなったりしたのは、この「推論」の成功/不成功の結果だったわけだ。けれど、この「推論」というのは、オプションにしてはなかなか重要なアイテムであろう。た

2 基準点によって指示対象が変化するシステムを「直示」と云い、「私」「昨日」「前」「ここ」のような「話し手との関係性だけを表す」アイテムを「直示辞」という。

たとえば(1)の最後でBが怒ってしまうのは、この「推論」によるのである。このことを指摘したものに、有名な「グライスの原則」がある。これはグライス Paul Grice (1913-88) の考えた「コミュニケーションを円滑に行なうために守られる4つの原則」だ<sup>3</sup>。

(7) グライスの「会話の協調原則」(cooperative principle)

- a. 量の原則 (maxim of quantity) 必要な情報は全て提供し、必要以上の情報を提供しない
- b. 質の原則 (maxim of quality) 真実でないと思うことは云わない
- c. 関連の原則 (maxim of relevance) 話題に無関係なことは云わない
- d. 様態の原則 (maxim of manner) 明晰な表現をする

つまり、この中の「関連の原則」に従ったからこそ、(1)におけるBは、Aが自分の返事に対して笑い出したのを、今の話題に関係のある内容、すなわち「蔑<sup>さげす</sup>み」と《解釈》して怒ったというわけである。さらには「譬<sup>ひ</sup>喩<sup>ゆ</sup>」だって、この原則があってこそ成立する。

(8) B: なあ、最近、深見のヤツ、ワケわからんくない……?

C: あいつ、アリワラノナリヒラやからなあ……

(8)のCの発話を「文字通りの意味」でとれば、「深見=在原業平」で、輪廻転生かSFかという世界になってしまう。ここはもちろん、例の紀貫之が『古今和歌集仮名序』で評した「心あまりてことばたらず」なヤツという《意味》で使われているのだけれど、それがわかるのは、「話題に関係のあることを云っている」はずという根拠から導かれる推論の結果に他ならない。

このように「推論」というのは、実際のコミュニケーションにおいては大層重要な役目を担っている。当然、先の(6)とは異なり、「推論だけしか用いられないコミュニケーション」だって存在する。『関連性理論』(Relevance Theory) を提唱するスペルベル Dan Sperber (1942-) とウイルソン Deirdre Wilson (1941-) は、「推論」のみで「コード」の存在しないコミュニケーションの例として、こんなタイプのを挙げている。

(9) C: おはよー、美喜、元気……?

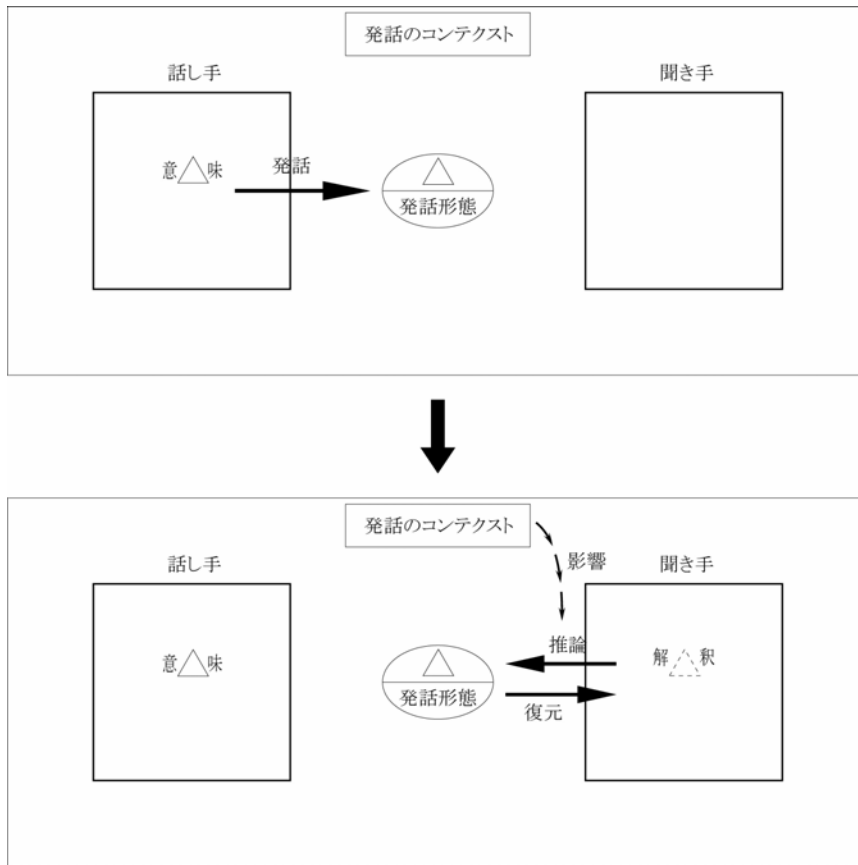
B: (黙って葛根湯<sup>かっこんとう</sup>の包みを取り出してみせる) ……

「葛根湯=風邪薬」だから、それを示すということは「風邪気味=元気ではない」という《解釈》を導くものだけれど、「葛根湯を示す=元気ではない」というような規則や習慣や暗号(すなわち「コード」)なんか存在しないだろう。つまり、(9)は「推論」のみで成り立っていることになる。これを図式化すると、(10)のようなものになるにちがいない。

---

3 哲学用語では maxim は「格率」と訳される。

(10) コミュニケーション図式 2



これは謂わば、完全な「推論モデル」である。スペルベル&ウイリソンよれば、聞き手は「推論」を駆使して何とか話し手の「伝えたかったこと」を復元しようとする。けれど復元されたものは 100%同じものではない。「コードモデル」が  $X \rightarrow X$  と全く同じものを「伝達=復元」したのに対し、「推論モデル」は  $X \rightarrow X'$  となって、偶々  $X$  を「伝達」することがあったとしても、仕組みとしては、それを保証するものではない。これはつまり、ことばの《意味》は、聞き手にゆだねられているということだ。あなたの「伝えたいこと」は、やはり「伝えきれない」。だって、所詮「他人の心」は見えないのだから……。

### 3. 相互行為モデル

本当にそうだろうか？ そうではないと云う人もいる。たとえば、ウィトゲンシュタイン Ludwig Josef Johann Wittgenstein (1889-1951) がそうだった。

彼はまず、「独我論」(solipsism)を徹底的に批判した。「独我論」というのは、平たく言えば「自分こそ全て」という考え方だけど、そこには「世界には他人はいても、それはみんな自分と同型・同種の人間で、つまり自分がたくさんいるようなものだ。だから、世界には自分しか存在しない」という認識がある。そしてこの認識は、「推論モデル」を否定する。というのも、誰もが「自分」であるなら、どんなに勝手(つまり「俺流」)に話そうが、「推論」なんて面倒くさいことはせずとも、直接相手の考えていることがわかるはずだからだ。けれど「推論」が必要

になってきたのは、相手の中に、その人にしかわからない「俺流のことば」<sup>4</sup>があるからだったのでなかろうか？ ということは、人間の数だけそれぞれの「俺ことば」が存在するのだろうか？ もしそうなら、絶望的に人間は「伝え合えない」部分を残してしまう……。そこで、ウィトゲンシュタインはこう考えた：「ことばは人々の中ではなく外にある」<sup>5</sup>。彼の本から、大変有名な箇所を引用しよう。

(11) とある語の意味とは、ことばにおけるその使用 (Gebrauch) である (『哲学探究』43)

つまり、ことばがどんな《意味》を持つかは、それを使うときに生じるのであって、それ以前に決定しているわけではない、というのだ。たとえば、次の例の1行目のCの発話の《意味》とは、いったい何なのだろうか？

(12) C: (B に向かって) 深見君て、記憶力悪いゆうてるくせに、美喜の誕生日だけは憶えてんねんで……

B: え……そうなん……

A: いやあ、ごめん、高橋の誕生日て、いつやったっけ……？

C: べつに憶えてもらわんでもえゝよ、いちおう4月17日やけどな……

Cの発話に続くそれぞれの発話が手懸かりに考えてみよう。Aは「どうしてわたしのは憶えてくれていないのか」という非難の《意味》にとっている。Bは「それくらいあなたに関心があるんだよ」という示唆の《意味》にとっている。はたして、どちらが正しいのだろうか？ そう、どちらも正しい。

もしCがある《意味》の通達を意図して発話したとするなら、その意図にそぐわない(正しくない)《意味》を否定したはずだ。ところが、Cは、いずれの発話を否定もせず、Aの発話を受けて(つまり肯定して)、次の発話を続けている。もちろん、最初の発話が、表向きはBに対して向けられている以上、Bのリアクションを第一番に吟味すべきなのだから、それに対してノー・リアクションだということは、Bの発話を肯定していると考えられるだろう。

これはすなわち、その行為はウィトゲンシュタインが述べたように、この発話の《意味》は、A、Bに対し「使用されたこと」によって決まったのであって、最初から決まっていたのではないということだ。そして、それぞれの《意味》は、その相手が如何にリアクションするかによって決まっている。コミュニケーションとは、単に発話するだけで終わるのではない。それが如何に受け取られ、如何に反応されるか、この繰り返し全体がコミュニケーションなのである。つまり、コミュニケーションとは「相互行為」(interaction)なのだ。

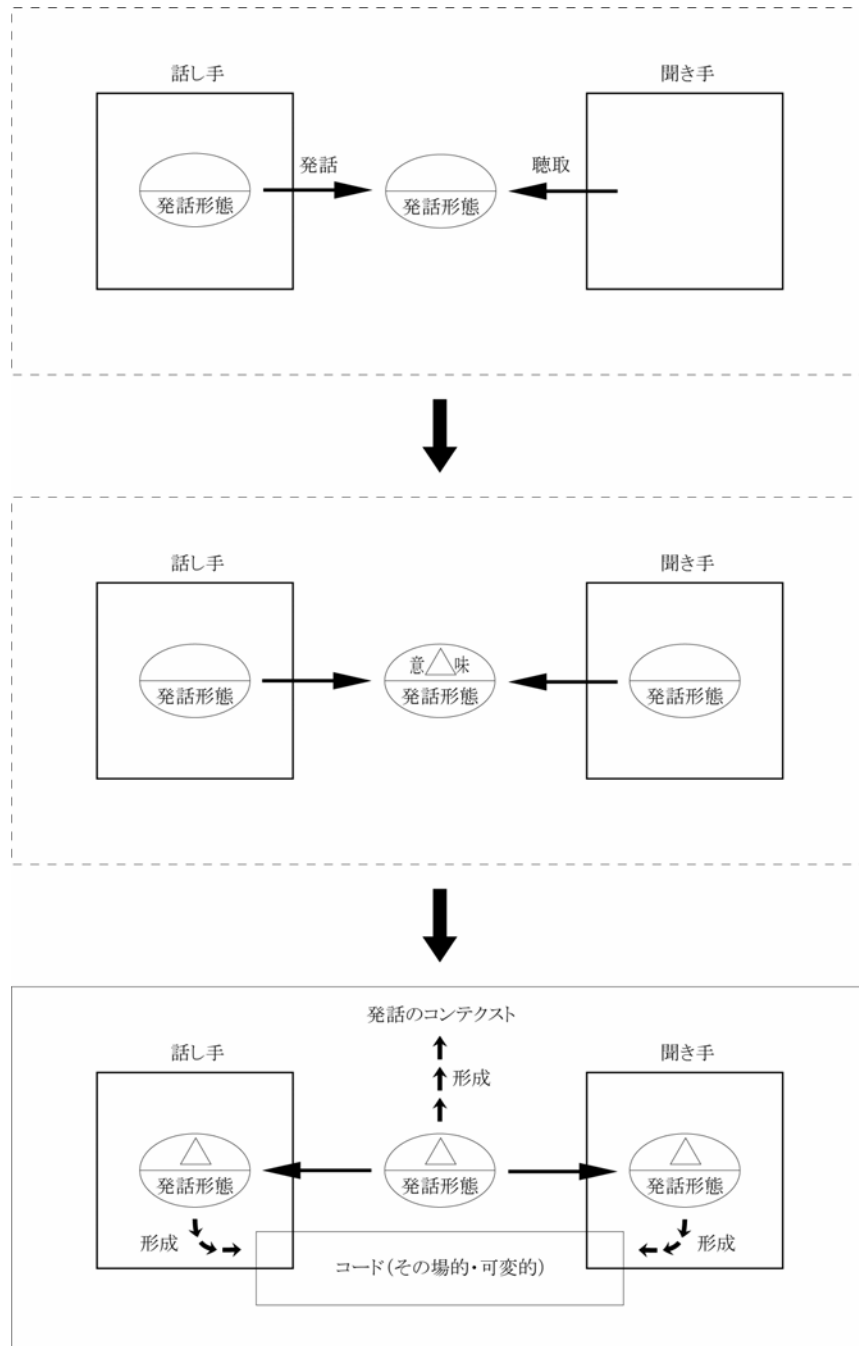
そしてまた、聞き手は、聞いている最中、静止しているのではない。相づち、身振り、しぐさ、表情などによってさまざまなリアクションを発信している。そしてこのリアクションは、話し手によってキャッチされ、話し手はそれを元に、聞き手の注意を更に喚起したり、話題を

4 ウィトゲンシュタインは、このような「自分の世界だけのことば」を「私的言語」と呼んだ。

5 ウィトゲンシュタイン、「痛み」のようなものさえも、「公的」なものと考えている。

変更したり、絶えず軌道修正を行なっている。この意味でもまた、コミュニケーションとは「相互行為的」(interactive)な協働／共同作業なのだ。要するに、ことばの《意味》は、「コードモデル」のように「話し手のもの」でも、「推論モデル」のように「聞き手のもの」でもなく、「両者のもの」なのである。そしてこのモデルは、(13)のようになるだろう。

(13) コミュニケーション図式 3



この辺の議論は素直には納得しにくいものだろうけれど、それはまた、あなた自身で考えてほしい。

#### 4. 伝わることば

というわけで、あなたの中には「伝えたいこと」なんて、最初からは存在しない。コミュニケーションの結果、事後的に「伝わったこと」(=《意味》)が生じ、この「伝わったこと」こそ「伝えなかったこと」になるのだ。つまり、「伝達」という面からすると、コミュニケーションとは100%「伝わる」ものなのである。

でも、そのためには、必ず「相手」、すなわち「自己とは異なる他者」が必要だ。相手は自分ではない、だからこそ、一所懸命、他人のことばに耳を傾けねばならない。そして、またくりかえしになるけれど、その「ことばの《意味》」は、二人の協働／共同によって生まれてくるものなのである。そこで、最後の例。

(14) A: なあ、あした、天気予報、「晴れ」て云うてたっけ……?

B: (黙って情報誌を取り出してみせる)……